路地のオバは語ることができるか
―中上健次が描いた被差別の老女たち―

石　川　真知子

被差別部落出身の作家として知られる中上健次（1946-1992）は，1977年「岬」で戦後生まれ初の芥川賞作家となって以来，江藤淳（1932-1999），吉本隆明（1924-2012），蓮實重彦ら著名な批評家たちに注目され，その作品が高く評価されてきた。しかし，腎臓癌により四十六歳の若さで急逝した1992年，現代最高峰の作家の死として国内外に報道されながらも，柄谷行人が言うように「本屋に行ってみると，彼の主要な作品がほとんど見当たらな」[1] いという状況があった。主要な中上作品は，その稀有な芸術性や文学的理論の達成は評価されても，決して可読性が高いとはいいがたく，いわゆるベストセラーを見込めるような読み物ではないことが原因だったといえよう。そこで，『中上健次全集』（全15巻，1995-1996）の刊行や，関連書籍や研究書の出版，作家の故郷である和歌山県新宮市で毎年開催されるセミナーでの作品の再解釈が進められ，「全作品を読めるかたち」[2] が整えられた。こうした活動の中心人物であった柄谷が自らの「任務を終えた」[3] と表明した1999年までには，この空前の「中上ブーム」[4] もひとつの区切りをむかえ沈静化したといえよう。

しかし2010年代以降，原作の映画化をはじめ，選集の出版，電子書籍の刊行が相次ぎ，中上文学は新たな読者を獲得しはじめている。現代と90年代後半の動向の違いは，「秋幸三部作」として知られる男性主人公（秋幸）のサーガよりも，被差別の女性たちの物語が注目されていることである。若い女性ストリッパーがヒロインの恋愛小説『軽蔑』（1991）と被差別部落の老女の意識を「語り」として描きこんだ『千年の愉楽』（1982）は，2011年と2012年にそれぞれ映画化された[5]。七人の老女たちが日本各地を放浪する物語『日輪の翼』（1984）は，2016年に現代美術作家やなぎみわによって舞台化され，好評を博した[6]。また，近年，中上が生前，故郷の春日に暮らす老女たちと交わした会話を録音したテープが発見され，それを基に制作されたドキュメンタリー『ETV特集「路地の声 父の声～中上健次を探して～」』（2016）[7] が，NHKで放映されたことも，被差別女性の物語の書き手としての中上に対する関心の高まりを示すものといえよう。

『千年の愉楽』（1982）に登場するオリュウノオバをはじめ，中上が描いた共同体「路地」の「オバ」と呼ばれる老女たちの「語り」によって浮き彫りにされる被差別の若者たちの姿については，これまでも多くの批評家や研究者たちに議論されてきた[8]。本論文では，『千年の愉楽』と『地

---

[1] 柄谷行人，「はじめに」，『中上健次と熊野』，太田出版，2000年，4頁。
[2] 前掲書，4頁。
[3] 前掲書，7頁。
[4] Livia Monnet, 'Ghostly Women, Displaced Femininities and Male Family Romances: Violence, Gender and Sexuality in Two Texts by Nakagami Kenji: Part 1.' *Japan Forum*. Vol. 8.1 (1996), p. 15.
[5] 廣木隆一（監督）／奥寺佐渡子（脚本），『軽蔑』，（原作：中上健次），角川映画，2011年。 若松孝二（監督）／井出真理（脚本），『千年の愉楽』，（原作：中上健次），若松プロダクション＝スコーレ，2012年。
[6] やなぎみわ（演出・美術）／山崎なし（脚本・作詞），『日輪の翼』，（原作：中上健次），2016年。
[7] 岡田亨（企画・撮影），『ETV特集「路地の声 父の声～中上健次を探して～」』， NHK，2016年。
[8] 例えば，以下の書籍を参照されたい。四方田犬彦，『貴種と転生　中上健次』，新潮社，1996年。渡部直己，『中上健次論　愛しさについて』，河出書房新社，1996年。

の果て　至上の時』(1983) をテクストに，オバたち自身の特異性や被差別性に焦点を当て，中上がいかに老女たちの「無告の声」[9] を表象しようとしたかを探る。共同体の語り部の役割を担ったオリュウノオバの陰画として，中上は語り部になれなかったオバたちも小説に登場させている。『地の果て　至上の時』に登場する，被差別の男たちに強姦された恐怖によって声を失ったモヨノオバはそのひとりであるといえよう。本論考では，従来，あまり論及されることのなかったこの沈黙のオバにも焦点をあて，性的に抑圧された老女の「聞かれざる声」の表象について考察する。

本論文のタイトルである「路地のオバは語ることができるか」は，ポストコロニアル研究の第一人者ガーヤットリー・チャクラヴォルティ・スピヴァクの論文のタイトル「サバルタンは語ることができるか」(1985)を踏まえたものである。この論文および著書『ポストコロニアル理性批判―消え去りゆく現在の歴史のために』(1996) [10] 中で，スピヴァクは「排除された現地生まれの情報提供者」である「南のもっとも貧しい女性」[11] の声を知識人が表象することの（不）可能性を論じている。スピヴァク自身，「第一世界」(移住先のアメリカ）の大学における「第三世界」(出身国であるインド）の代弁者や現地情報を提供するポストコロニアル知識人という立場の矛盾を認識したうえで，サバルタンの利害を第一に重視する研究や教育活動を行っている。

中上健次もまた南紀熊野の被差別部落出身の作家として，「言葉を持つ者」[12] の権力を自覚し，被差別部落民の代弁者となることを自戒していた。小説家として被差別民の「無告の声」をいかに描くかという中上の挑戦は，スピヴァクの「サバルタンは語ることができるか」という問いかけに共鳴しているといえよう。以上のような視点から，本論文では，中上の老女の物語を被差別，女性，老い，などの文脈において重層的に抑圧されてきた者の声の表象として読む。

嫗とオバ

中上が描いた「オバ」の中で，最も関心を集め，芸術性が評価されてきたのは間違いなくオリュウノオバであろう。『千年の愉楽』の全篇に声を響かせるこのオバを，吉本隆明は「古代やアジア的な世界を透視し，その世界に理念を与える最高の巫女」[13]，江藤淳は「日本そのもの」である「路地」について語り謡う「真実」の「声」[14] と，最大の賛辞をもって評した。路地の語り部であるオリュウノオバとはどんな存在なのか。この疑問を考える前に，路地とはどのような場所であるのかを整理しておこう。

吉本や江藤のように，路地を前近代的な慣習の残る被差別部落とみなし，それを日本またはアジアの原風景の表象として読む読者は少なくない[15]。

---

[9] 中上健次，「紀州　木の国・根の国物語」，『中上健次全集14』，集英社，1996年，613頁。

[10] Gayatri Chakravorty Spivak,‘Can the Subaltern Speak?’ *Marxism and the Interpretation of Culture*. Eds. Cary Nelson and Lawrence Grossberg. Illinois University Press, 1985, p. 271-313, および *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*. Harvard University Press, 1999. 前掲書の邦訳は以下のとおりである。ガーヤットリー・チャクラヴォルティ・スピヴァク，『サバルタンは語ることができるか』，上村忠男訳，みすず書房，2000年，および『ポストコロニアル理性批判　消え去りゆく現在の歴史のために』，上村忠男，本橋哲也訳，月曜社，2003年。

[11] Gayatri Chakravorty Spivak, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*, p. 9. ガーヤットリー・チャクラヴォルティ・スピヴァク，『ポストコロニアル理性批判　消え去りゆく現在の歴史のために』，23頁。

[12] 中上健次，「紀州　木の国・根の国物語」，613-614頁。

[13] 吉本隆明，「世界論」，『千年の愉楽』，解説，河出文庫，1996年，251頁。

[14] 江藤淳，「〈路地〉と他界　声と文字と文体」，『千年の愉楽』，解説，河出文庫，1996年，289-291頁。

[15] オリュウノオバを「アジアの伝唱者」と評したリービ英雄もこうした読者に含むことができるだろう。リービ英雄，「アジアの伝唱者,オリュウノオバ―韓国で「千年の愉楽」を読む」，『國文學 ： 解釈と教材の研究』30(3)，學燈社，1985年，60-64頁。

しかし，『千年の愉楽』以前に発表された秋幸三部作の前半二篇である「岬」と『枯木灘』(1978)では，路地は，陰国(こもりく)とも呼ばれる南紀熊野の中心都市・新宮の街はずれに位置する春日という地区にあるスラムのような集落であるということは読み取れても，そこが被差別部落と特定しうる歴史や状況がはっきりと描かれているとはいえない。したがって，1980年代初め頃には，これらの小説を被差別部落の文脈で読んでいない読者も多数存在していた[16]。この事実は，平野が指摘するように，「路地」とは「マイノリティの問題」でも「被害者意識からの所産」でもなく，あくまで小説の書き手である中上が「総体としての現実をおさえこむための基地」[17] として創造したものにほかならないことを示している。『千年の愉楽』および秋幸三部作の最終篇である『地の果て　至上の時』(1983) に至って，被差別部落を連想させる語句やエピソードが含まれ，路地は明確に「被差別の歴史性を背負った場所」[18] として読まれるようになったが，路地の第一義は，高澤秀次が定義するように，中上の物語における「中心的トポス」[19] であるといえよう。

「物語の定型」と題された1978年の公開講座で，中上は「物語」の「モノ」とは「魂」であり，「カタリ」とは「単に語って聞かせるというのではなく，宗教的な要素や年代記をあわせ伝えるということ」と説明している[20]。また，1984年から85年にかけて『国文學』に連載された「物語の系譜　円地文子」では，現代の女流作家である円地文子（1905-1986）を，古代の王朝物語の語り部や書き手であった女性，とくに年老いた女性を意味する「嫗」になぞらえ，「言の葉，言霊」の伝達における老女の役割について考察している[21]。嫗は共同体における「知識・情報のキーステイション」[22] として，先祖の経験や知恵を次世代に語り継ぐ役目を担っている。嫗がこのような特殊な能力を持つにいたったのは，老いて妊孕能力を失ったことにより「共同体から直接的な生産力でないものとして脇に追いやられ」[23] ているからである―中上がこの逆説をもって描いた人物，それが路地の嫗オリュウノオバである。

オリュウノオバー路地の語り部

六篇の短篇からなる『千年の愉楽』は，1980年7月から82年4月にかけて雑誌『文藝』に連載され，1982年8月に連作短篇集として単行本化された。

---

[16] 平野栄久，「＜路地＞のもつ意味―中上健次論」，『文学の中の被差別部落像　戦後篇』，明石書店，1982年，285頁。

[17] 前掲書，292頁。

[18] 高澤秀次，「中上健次キーワード事典」，『別冊太陽』，平凡社，2012年，185頁。

[19] 前掲書，185頁。

[20] 中上健次，「物語の定型」，『中上健次発言集成６』，第三文明社，1999年，225頁。

[21] 中上健次，「物語の系譜　円地文子」，『中上健次全集15』，集英社，1996年，242-250頁。「中上の「嫗」への視点は，志斐嫗や稗田阿礼の「語り」に依拠していると考えられる。志斐嫗は，持統天皇（645-702）の侍女であり，二人の間でかわされた歌が万葉集に残されている。志斐嫗の歌「いなといへど語れ語れと宣らせこそ志斐いは奏せ　しひがたりと宣る」（巻三，二三六）は，中上の作品集『重力の都』に収録されている短篇「愛獣」の冒頭に，熊野の女らの語りの比喩として引用されている。古事記（712）の語り部である稗田阿礼は，記憶力が優れていたため，天武天皇（?-686）から帝紀・旧辞の暗誦を命ぜられた舎人であるといわれているが，柳田國男や西郷信綱は巫女であったと推察している。路地の人々の生年月日と命日を諳んずることができるほど物覚えの良いオリュウノオバは，巫女と推察された稗田阿礼を模したものと読むこともできよう。春日で行った「兄妹心中の解読」(1978) と題された公開講座からもわかるように，中上は柳田国男の稗田阿礼や毛坊主に関する論考が収録されている『妹の力』の熱心な読者であった。上記の考察については，以下の文献を参照されたい。中上健次，「重力の都」，『中上健次全集10』，集英社，1996年，102-114頁。中上健次，「兄妹心中の解読」，『中上健次と熊野』，太田出版，2000年，76-92頁。柳田国男，「稗田阿礼」『柳田国男全集１１』，ちくま文庫，1990年，288-304頁。西郷信綱，『古事記研究』，未来社，1973年，9-56頁。

[22] 中上健次，「物語の系譜　円地文子」，248頁。

[23] 前掲書，248頁。

六篇は正確な時系列に並べられていないが，全体の物語の時代設定は，帝国時代から戦後にかけてのおよそ三十年間にあたる。それぞれの短篇には，路地で最も古い血統である「中本の一統」の出の若者が一人ずつ主人公として登場し，傷害，窃盗，賭博，薬物中毒などの犯罪行為や，情婦との色情に溺れ，身を滅ぼしてゆくさまが描かれる。六篇の物語はすべて若者の死で幕を閉じる。

六人の主人公はいずれも，住民が協力して子どもを育てるという路地の慣習の中で成人した。このことは，中上が阿部謹也との対談で，被差別部落は「母系」の共同体であるため，路地では「父・母といった概念がな」く，「男の親，女の親になりうる性的に成熟した男女」である「アニとイネ」がすべての子どもの「親」になる[24]，と語っていることに符合する。共同体唯一の産婆オリュウノオバは，路地の者にとって，新しい命を迎え入れる原初の「仮母」[25]であり，彼らの家系と生日命日を暗記し，路地に起こったことのすべてを記憶し語り継ぐ「嫗」という特別な存在である。いまや，床に伏し，死期を迎えつつあるオリュウノオバが，自らの記憶だけを頼りに，路地の苦難に満ちた歴史や，中本の若者の波乱に満ちた生涯を誰に語るともなく回顧する―それが『千年の愉楽』の骨組みである。

オリュウノオバは，「毛坊主」[26]と蔑称される半僧半俗の僧の未亡人であり，三歳の息子を亡くした母親でもある。夫の礼如さんは，中本の一統の出で，かつては路地の占有的職業である靴職人をしていた。しかし，一人息子が「茶粥を頭からかぶって大やけどをして死んだ」[27] 翌年，京都の寺に修行に行き，路地に戻ってからは，人々の葬式や法事の際に僧の役を務めるようになった。路地の人々にとって，産婆のオリュウノオバは彼らをこの世に迎い入れ，毛坊主の礼如さんはあの世に送る存在である。しかし，帝国主義時代の日本においては，オリュウノオバと礼如さんは産婆と毛坊主という触穢の職業を持つ新平民であるということのほかに，天皇の赤子となるべき息子を育てそこね，「富国強兵」と「良妻賢母」という規範から逸脱した夫婦という烙印を押された，被差別部落民の中でも最も周縁的な存在であるといえよう。

礼如さんが，路地の法事を一手に引き受けることになったのは，路地の住民が多く檀徒として属していた浄泉寺の和尚が「天子様に弓引く計画」[28]に加担したと逮捕されて以来，戦後に新しい住職が赴任して来るまで，路地を訪れる僧がいなくなっていたからである。この和尚とは，1910年に摘発された幸徳秋水（1871-1911）を首謀者とする明治天皇暗殺未遂事件（大逆事件）に連座させられた真宗大谷派の僧侶・高木顕明（1864-1914）のことである。この事件では，二十六名が起訴され，社会主義者として知られていた幸徳，その協力者とされた新宮在住の医師・大石誠之助（1867-1911）を含む十二名が死刑に処せられた。僧侶の高木は，大石との交友関係から「紀州グループ」[29] の一味として連座させられ，無期懲役となったが，三年後に服役中の秋田刑務所で自殺した。大逆事件とは，全国の社会主義者や無政府主義者を根絶しようとした明治政府による思想弾圧

[24] 中上健次，阿部謹也，「中世ヨーロッパ・被差別民・熊野」，『中上健次発言集成2』，第三文明社，1995年，63頁。

[25] 中上は，「仮母」は「反転するグレート・マザー」「追い落とされた母」という性質を持つがゆえに，「オバ」であり，共同体に「知識・情報」を還元する「語り手」の役割を担う，と説明している。詳しくは，「物語の系譜 円地文子」242-250頁を参照されたい。

[26] 中上健次，「千年の愉楽」，69頁。

[27] 前掲書，12頁。

[28] 前掲書，16頁。

[29] 辻本雄一，「「大逆事件」とその影響」，『人権からみた新宮のあゆみ（草稿）』，新宮市教育委員会，2005年，62頁。「紀州グループ」は「新宮グループ」とも呼ばれている。高澤秀次は，辻本雄一の言葉を引いて，「そもそも「新宮グループ」はなどというものは，権力の側からの命名であって，具体的に「大逆」と結びつく芽を宿していたわけではない」と指摘する。高澤秀次，『文学者たちの大逆事件と韓国併合』，平凡社新書，2010年，113頁。

事件であり，「限りなく捏造に近い政治事件」[30]であった。

大逆事件は，中上の紀州熊野を舞台とする小説に頻出するモチーフである。1977年に発表したエッセイ「私の中の日本人　大石誠之助」で，中上は，大逆事件において，紀州は中央集権との闘いに，「またも，敗れた」[31] と考える独自の視点を展開している。

> 熊野とは，神武天皇が東征に来た時，＜大熊髪(ほの)かに出で入りてすなはち失せき。ここに神倭伊波礼毘古命(かむやまといはれびこのみこと)，倏忽(にはか)に惑(を)えまし，また御軍(みいくさ)も皆惑えて伏しき＞と古事記にもあるところである。紀州熊野はたえず闇の中にある。大和朝廷の影にあり，近畿畿内の文化のすぐそばにありながら，影である。それは江戸の時代だけにとどまらない。幕末，明治維新，紀州藩はうまく立ち廻ることが出来なかった。大袈裟に言えば，神話の時代から歴史にその地名が現れながら，冷や飯を食べさせられ続けてきた。紀州に雑賀・根来の武装団が在り，水軍が在り，伊賀・甲賀の忍者集団が紀伊半島に在ったのも，闇の紀伊半島，闇の紀州という観点から見れば不思議でもなんでもない。その幸徳秋水や大石誠之助らが連座し，処刑された大逆事件も，闇の紀州という観点から見れば，起こるべくして起った事件だという気がするのである。[32]
>
> （中略）
>
> 大石誠之助は，紀州，熊野を一身に体現していると言ってもよい。時間が，その大逆事件で大石誠之助が逮捕された時以来，流れていない。その大石ドクトルという人を見ていて，小説家の私は，何やら日本で起った架空の南北戦争である気がし，アメリカの作家フォークナーの小説を読んでもいるような気がするのである。つまり，大逆事件は，時の官憲のデッチ上げである。デッチ上げをやる人間が，大逆という汚名を着せるには，日本という国の在るべき姿を思い描くことが必要であった。[33]

中上にとって，大逆事件とは，神武東征の舞台として記紀に記されて以来，たえず中央権力との戦いに「敗北」し続けてきた「闇の国家」・紀州熊野において，「起こるべくして起こった事件」である。また，アメリカの「南北戦争」にも比する「日本という国」と「紀州というもうひとつの国」の戦争なのである[34]。ここで中上が南北戦争を引き合いにするのは，彼が，紀州熊野を「地政学的視点」における「南部」と捉えていたからにほかならない。中上の「南部」は，イタリアの社会主義者アントニオ・グラムシ（1891-1937）が「南部問題についての覚書」（1926）の中で示した，「イタリアがもっと速やかに文明的発展をとげるのを妨害している鉛の錘」として「北部の大衆」から差別された「南部」と共鳴する。ここには北部人が，南部人を「生物学的に劣った」「半野蛮人か，もしくは完全な野蛮人である」と侮蔑する視点も含まれている[35]。グラムシの地政学的視点による考察は，ポストコロニアル研究や，サバルタン・スタディーズの研究者たちの基礎的理論となっていることを踏まえると，紀州熊野を日本の「南部」と位置づけ，そこに生きる被差別者の「無告の声」を描こうとする中上も，「サバルタンは語ることができるか」という問いに挑戦する書き手であると位置付けることができよう。

オリュウノオバの声は大逆事件をどのように語っているのだろうか。例えば，『千年の愉楽』の第一話である「半蔵の鳥」には，主人公の半蔵が

---

[30] 高澤秀次，『文学者たちの大逆事件と韓国併合』，7頁。
[31] 中上健次，中上健次，「私の中の日本人　大石誠之助」，『中上健次全集14』，367-371頁。
[32] 前掲書，367頁。
[33] 前掲書，370頁。
[34] 前掲書，370頁。
[35] アントニオ・グラムシ，「南部問題についての覚書」，『知識人と権力』，上村忠男編訳，みすず書房，1999年，7頁。

路地の裏山で見たという坊主頭の「首をうなだれた男」[36]の幽霊の話から，浄泉寺の和尚について思いをめぐらすオリュウノオバの声が描かれている。

> オリュウノオバはその話を聞き，礼如さんが折に触れて言う浄泉寺の前の代の和尚だろうと思い，あの人なら何のくったくもない半蔵に姿を見せるだろうと一人うなずいたのだった。前の和尚は半蔵の親の彦之助やキクドウら路地の者を集めて，実のところ恐ろしい悪人だった者を他から呼び話をきかせ天子様に弓引く計画をしたとして監獄に入れられ首をくくられたと聴いたが，その和尚なら路地の者らがどうなったのか心配で路地の周りをさまよいかねない，とオリュウノオバは考え，丁度，通りかかった半蔵を呼びとめ，「幽霊みた言うて，恐ろしことないど」と言った。[37]

路地の若者を呼びとめ語りかけるオリュウノオバの声は鉤括弧に括られてはいるが，和尚の慈愛に満ちた人柄の思い出は，無言の意識として，地の文に埋め込まれている。無実の人物に大逆罪の濡れ衣を着せ，命を奪い，紀州をまたも敗北の闇に突き落としたのと同じ権力によって，社会から抑圧されてきたオバの語りは「聞こえざる声」となるしかない様子が描かれているといえよう。

「路地に起こった悉くを知っている」[38]と言われるオリュウノオバのところへは，路地の住民のみならず，路地から「他所」へ移住した人々も話をしにやってくる。以下の引用は，第二話「六道の辻」から，幼少期に路地を出た若者（アニ）が，オリュウノオバを訪ねてくる場面である。アニは，現在の商売の苦労を言い立てるうちに，路地で暮らした子どもの頃が懐かしくなり涙ぐむ。そのアニを横目に，オリュウノオバは，かつて路地の人々が受けた差別と屈辱の生活をありありと思い浮かべるのだった。

> 昔まだ男衆らがまともな職につこうにも職がなくて屈強の者は山の木馬引き，手先の器用なものなら下駄や草履の直しをしに路地の山の頂上にある門を通って城下町の方へ降りて御一新で花町になった屋敷跡に車をひいて行くか，路地の蓮池近辺にわき出る清水を利用しての獣のなめしをするしかなく，博奕，盗人，スリが男らの茶飯事としてあった時，律儀だった事もあって物心ついた頃には城下町の方に乾物屋を出した親に連れられてそのアニは，他所で暮らしていた。そのアニは子供の頃見た路地と今はずいぶん変わってしまったので妙に味気ない気がすると言ったがオリュウノオバはその時はさして齢も行っていないアニが昔をなつかしんでどうするのだと言ってやった。[39]

「昔のものは昔のもの，今のものは今のもの」と考えるオリュウノオバには，アニの郷愁は「分からない事」であったが，話をするうちに，アニが路地の歴史をほとんど知らないということに思い当たるのだった[40]。

> ただオリュウノオバはそのアニが子供の時代に路地の裏山が城下町と他所とを区切る境界になり，その頂にある小さなほこらを人は御堂と呼んでいたがそこに柵が設けられ門が取りつけられてあったことも知らないのだとわかり，普段の時は日暮れると路地と町の行き交を閉ざすように門が閉められ，正月になると松の内が終るまでは城下町には入ってはならないと閉められたままだし，町に入ってきた者がいたなら棒を持った町の者らに追いかけまわされたと教えてやった。[41]

---

[36] 中上健次，「千年の愉楽」，16頁。
[37] 前掲書，16-17頁。
[38] 前掲書，34頁。
[39] 前掲書，34頁。
[40] 前掲書，34頁。
[41] 前掲書，34頁。

戦前の新宮の都市空間構造と被差別部落については，若松司と水内敏夫の論文「和歌山県新宮市における同和地区の変容と中上健次」（2001）に詳しいので，参照されたい[42]。若松と水内の論文に引用されている文献「新宮市の同和地区の歴史（うつり変わり）」には，臥龍山は「湿地帯」で，この「環境の良くない土地に同和地区の人々は半ば強制的に住まわせられ」，町へ行くときには「番人に門をあけてもらって」いた，と記述がある[43]。臥龍山は，1970年代末から80年代初めに新宮の同和対策事業の一環として切り崩されるまでは，新宮の人々にとって，被差別部落の地政学的周縁性を象徴する風景であったといえよう。

オリュウノオバとアニのやりとりには，町の者の路地に対する過酷な差別が日常茶飯事であった老人世代と，先祖の屈辱の歴史を知らない若者世代が対照的に描かれている。また，路地に住み続け，被差別民という烙印を押され続けた老女と，他所へ移住し，そのスティグマから自由になった若者というコントラストも際立っている。野口道彦が指摘するように，このアニに，幼少期に母の再婚に伴い出生地の春日から他地区の被差別部落へ移り，今は東京に住む「他所」の者でありながら，臥龍山の切り崩しと春日の住宅改善事業による故郷の変化を誰よりも気に病む中上自身の姿を重ね合わせることも可能であろう[44]。短篇集『熊野集』（1984）には，自らを「路地の子」[45]と呼び，春日に強い愛着を表明する一方，「路地は私とは無縁である」[46]という事実を認めざるをえない作家の姿が描かれている。アニと中上に共通する，失われた過去に対する郷愁という態度は，春日部落の現実とその住民が晒され続けている差別や屈辱からは無縁であるということの証拠なのである。

このように『千年の愉楽』では，随所に，先祖が経験した過酷な差別の歴史に無関心な路地の若者を見つめるオリュウノオバが描かれている。

> 四民平等だと，上も下もなく皆一緒だと政令が出されけしからんと思った百姓らに竹槍で刺され家に火をつけられる事があった以降も，新宮では，神仏の社を中心に発展した町だから特に，二月の御燈祭り十月の御船漕ぎには町の中に入っても追われ殴られたのが，いまは若衆らは何のとがめを受けず加わり，松明を持って神倉山の神体から競って駆け下りているし神社の神輿を肩にかつぎ御船漕ぎに加わって裸を町衆の眼にさらしている。[47]

「政令」とは，1871年の解放令を指す。解放令と相まって，学制，徴兵令，地租改正など明治政府の新政策に対する民衆の不満が高まり，えた・ひにんから平民とされた人々がスケープゴートとして，襲撃される事件（講学上，解放令反対一揆，または新政府反対一揆とも呼ばれる）が相次いだ[48]。傷害，殺人，住居の焼き討ち，略奪を含む被差別部落民に対する暴動は，1877年までに二十四件を数えた[49]。中上の紀州サーガにおいて，オ

---

[42] 若松司，水内敏夫，「和歌山県新宮市における同和地区の変容と中上健次」，『人権問題研究』，１号，大阪府立大学，2001年，55-93頁。
[43] 前掲書，57頁。
[44] 野口道彦，「中上健次の路地と部落問題」，『研究紀要　解放研究しが』　第11号，反差別国際連帯解放研究所（リリアンス），2001年，81頁。
[45] 中上健次，「千年の愉楽」，232頁。
[46] 中上健次，「熊野集」，『中上健次全集5』，413頁。
[47] 中上健次，「千年の愉楽」，142頁。
[48] 黒川みどり，『近代部落史　明治から現代まで』，平凡社，2011年，34頁。上杉聰，『これでなっとく！部落の歴史続わたしのダイガク講座』，解放出版社，2010年，58-63頁。
[49] 黒川みどり，『近代部落史　明治から現代まで』，34頁。

リュウノオバは新宮における解放令反対一揆を記憶し，その「火をふくような屈辱」[50]の歴史に対する怒りを保ち続け表明するほとんど唯一の人物である。

> 誰も昔やった事を謝った者はいない。四民平等だと言うがひと度昔のように物資が不足したりかつてあった震災のような事が起ると皆殺しに遭うのは見えている。朝鮮人が多数いきなり理由なしに殺されたにもかかわらず新日本人とされたのと同じような意味が，四民平等に入っている。オリュウノオバはその意見を口がすっぱくなるほど礼如さんに言っていたのだった。仏につかえる身の礼如さんは人がよいのでオリュウノオバが今の平等思想は疑わしい，新宮の人間や国民は何事があると必ずや牙をむくと言うと，「オリュウ，そんなに言うものでない，生きてくるという事も死ぬという事も皆同じや」となぐさめるのが常だった。[51]

オリュウノオバは，国家の政策としての平等思想が，被差別民に対する憎悪を増幅させ，解放令反対一揆や，関東大震災のあとに起きた朝鮮人襲撃のような暴動を誘発した元凶であることを知っている。一方，礼如さんは，すべてのひとに与えられる生死という「平等」の前には，町の者も路地の者も変わりないとオリュウノオバを諫める。仏教の教条からすれば，明治政府であろうが，路地であろうが，平等を謳うことは，道義的に正しく，批判するべきものではない。しかし，礼如さんの言葉は，覇権的イデオロギーを批判する者を沈黙させようとする態度において，現代の部落問題において常に論争の的となる「寝た子を起こすな」[52]というシニシズムに継がっているといえよう。

礼如さんの声は鉤括弧に括られている一方，権力者のイデオロギーの矛盾を批判するオリュウノオバの声は地の文に埋め込まれている。オリュウノオバの語りは，「路地そのもの」[53]の声のように響いているようにみえながら，実は，中央に向けて被差別共同体を代表・代弁するというような政治性を担うものではないばかりか，聞き届けられるための可聴性も持っていないのだ。スピヴァクの言葉を借りるならば，「性的にサバルタンの位置に置かれた主体」が「声を発することのできる空間は，ここには存在しない」[54]ということになろう。共同体の屈辱の歴史と権力者に対する憤りを語る「聞かれざる声」―それが路地の嫗オリュウノオバの語りであり，中上が表象しようとした被差別者の「無告の声」なのである。

モヨノオバー押し黙る老女

中上の被差別部落民の物語には，オリュウノオバの陰画として，嫗になれなかった，つまり共同体の語り部の役割を担うことのできなかったオバたちも登場する。たとえば，『日輪の翼』には，1980年初めに同和対策措置法の施行により路地を失い，日本各地を彷徨する七人のオバたちが登場する。これは，彼女たちが語り部になるための根拠（地）を喪失したことを意味している。秋幸三部作の最終巻である『地の果て　至上の時』も，集落の解体と地域の近代化のあおりをうけて，故郷の「路地」をおわれる人々の姿を描いている。秋幸の物語の太い流れのところどころに登場するオバたち―十五歳で女郎に売られた過去を持つユキ，路地の男たちに襲われた恐怖によって声を失ったモヨ―なども路地の嫗になれなかった老女と

---

[50] 中上健次，「千年の愉楽」，54頁。
[51] 前掲書，142-143頁。
[52] 秋定嘉和，林正孝，村越末男（監修），「寝た子を起こすな」，『新修　部落問題辞典』，解放出版社，2000年，354頁。
[53] 江藤淳，「〈路地〉と他界　声と文字と文体」，289-291頁。
[54] ガーヤットリー・チャクラヴォルティ・スピヴァク，『サバルタンは語ることができるか』，112頁。Gayatri Chakravorty Spivak, ‘Can the Subaltern Speak?’ p.308.

見ることができよう。ユキに関しては既に別稿[55]にて論じたので，ここではモヨノオバに焦点をあてる。

モヨノオバはかつて，和歌山県新宮市の材木商である佐倉家の女中として働く美しい娘であった。彼女の口がきけなくなったのは，佐倉の番頭として働いていた浜村龍造（主人公秋幸の実父）と彼の賭博仲間のヨシ兄が屋敷に強盗に入った際に，強姦されたのがきっかけだった。その事件からほどなくして，モヨは行方をくらまし，数年後に路地に移り住んだ時には，良一という幼い男の子を連れていた。龍造の異父妹で，路地の若者の姉的存在として慕われているモン姐さんから，良一は実の子なのかと尋ねられたモヨノオバは，「自分は唖だから声が出ないと答えをはぐらかし」，佐倉に突然あらわれた「二人の身体の大きな狼のような男ら」のした事は「語った」が，彼らの名前は決して明かさなかった[56]。

> 男らはガソリンをまき火を放った。一人がモヨノオバを脅し金目のものを出させ，思いついて犯しにかかり，一人は佐倉の旦那が寝ている部屋に入りしばらくして血しぶきでまみれた体にかかえきれないほど証書の類を持って出て来て，大鋸屑をつめていたドンゴロスに突っ込み，いつまでも果てる事なく腰を動かしている男の尻を地下足袋で押え，「もっともっと蹴破るほどに突かなあくものか」とあおる。痛みに呻くモヨノオバを男は人を射すくめるような深く昏い眼でみる。モヨノオバは火がすぐ耳元で音を立てるのを聴き，男がドンゴロスの口を持った手を放して革バンドのバックルをはずしズボンをずらし，のしかかった男を足で蹴り落とすのを見て悲鳴を上げようとしたが声は出なかった。その時から声が出ないのでモヨノオバは一部始終を見て身にむごい事をこうむったにもかかわらず誰にも話すことはないと殺されもせず生き長らえたのだった。[57]

モヨノオバがモン姐さんに「語った」声は，オリュウノオバの声と同様，地の文に埋め込まれており，対照的に強姦する男の声だけが，鉤括弧に括られている。これは，モヨノオバの「語り」が通常の状態で発声されモン姐さんに聞かれているものでなく，被差別の女性同士（二人は，部落民として主流の社会からだけでなく，未婚の中年女性として家父長制規範からも逸脱者とみなされる者同士である）の中だけで理解される「聞かれざる声」であるということを示しているといえよう。

路地の者は，モヨの声が出なくなったのは「鴉天狗」[58]に呪われたからだと言い，良一のことはモヨが他所で秘密裏に出産した私生児だと噂していた。しかし，ヨシ兄は，良一に「お前は唖のモヨの子じゃと思とるかもしれんが，落ちとったのを拾われて育てられた子じゃ」[59]と言い放つ。古い住居が取り払われ野原になった路地の跡地にテントを立て，モンゴルの騎馬民族を気取るヨシ兄は，龍造の子の秋幸を路地で生まれたジンギス・カンと呼ぶ一方，良一のことは路地の血筋ではないと差別していた。路地の住民のモヨノオバに対する，邪悪な者に魅入られた者という「魔女狩り」を思わせるスティグマのつけ方にも，ヨシ兄の良一を他所者として拒絶する態度にも，先住者のアイデンティティや共同体感覚に潜む，移住者に対する差別意識がある。この被差別共同体内部における差別の再生産は，中上自身の言葉を借りれば，「被差別者は差別者」[60]であることに起因してい

---

[55] 石川真知子，「オバたちの「ヴァギナ・モノローグ」」，『熊野大学文集　牛王』，熊野JKプロジェクト，2016年，115-128頁。
[56] 中上健次，「地の果て　至上の時」，『中上健次全集６』，集英社，1995年，129頁。
[57] 前掲書，129頁。
[58] 前掲書，122頁。
[59] 前掲書，277頁。
[60] 中上健次，柄谷行人，「文学の現在を問う」，『柄谷行人 中上健次 全対話』，講談社，2011年，49-51頁。

るといえよう。つまり，「被差別者」であると自己認識する（アイデンティファイする）者は，同時に，被差別者アイデンティティから逸脱する者を「差別」する者なのである。

『千年の愉楽』にも描かれているように，路地は，捨て子や私生児にかかわらず共同体全体で子供の面倒をみるという一面もあり，モヨのような女が逃げ込むことができる唯一の場所ではあった。しかし，住民の絶え間ない噂話や好奇に満ちた目を避けるためか，モヨノオバは家にこもりがちになっていった。

> 路地の家で，モヨノオバは夜になる度にお経をあげた。滅多に外へ出て行かなかったのでお経をあげ終わるとモヨノオバは外で起ったことをききたがった。路地の三叉路に一軒あった駄菓子屋の店先から蜜柑を盗んだ事，店先のつり銭の籠の中へ手を突っ込んで金を盗り内緒でカレーライスを食べに行った事を白状したかったが，良一は，路地で，井戸の脇の田上の家に胴が二つの赤ん坊が生れた，パリキと仇名されるいかけ屋の家で夜な夜なのっぺらぼうがあらわれ，どうかブリキでもよいから人並みに目鼻をつけてくれと，せがむと言った。ことごとくそれらはモヨノオバに良一がして来た事をかくす為の作り話だった。モヨノオバは驚き，苦しみを共感するように，言葉にならない喉の声を出し，不具や奇形の吹きだまりのように良一がデッチ上げた路地の中で育つシャム双生児がどう成長し続けているか話してくれと言った。[61]

幼い良一は，モヨノオバの「言葉にならない喉の声」を理解し，本当は自分がその日に外でして来たいたずらを話したいという気持ちを抑え，オバの望みを叶えるために，路地の「不具や奇形」の話を作り，語り続けた。

しかし，良一から，シャム双生児が手術で切り離され「胸から下にかけて半分の人間」[62]になったと聞かされてから，モヨノオバは路地の家にますます閉じ籠るようになった。そして，自分のように押し黙って内に籠もる人間と，外に出て快活に生きる人間の違いについて思い耽るのだった。

> 路地の奥深くに良一が作り上げた不具と奇形の人間は息づき，日の当たっている外を歩いてまわるのは，表に痕の出ていない，だが内に因子を抱えた人間ばかりだと思っていた。表に痕の出ていない者は，生まれ出た愉楽につかるように恋をし，賭博を楽しんでいる。[63]

ここでは，内と外，暗闇と太陽，障がい者と健常者などの二項対立を見つめるモヨノオバの視点が描かれている。幼子を連れて住みついた路地にも，移住して来た者や障がい者や私生児を産んだ女を差別する因子があり，差別者から逃れるためにさらに奥深く沈み込むしかなかった自分。痕が表に出ていないからこそ，欲望のままに生き「日の当たっている外を歩いてまわ」っていられるが，実は「内に因子を抱え」ている路地の者や強姦者たち―自分を路地の奥深くに閉じ込めた者たちを見つめ続けるこの被差別の老女の聞かれざる声は，中上の小説の中で描かれた最も苦痛に満ちた「無告の声」であるといえよう。

オバの「聞かれざる声」を通訳する若者

良一は，自分と同様に路地の私生児であり，異母兄の可能性もある秋幸が，かつて路地に住んでいたモヨノオバの存在さえも知らないことを知り，

---

[61] 中上健次，「地の果て　至上の時」，317-318頁。
[62] 前掲書，318頁。
[63] 前掲書，318頁。
[64] 良一は，路地の兄貴分である秋幸を「アニ」ではなく「隊長」と呼ぶ。この独特な呼称には，自分と同様，路地の私生児であるほか，中本の一統の血筋ではない男である秋幸に対する良一の親近感が込められているといえよう。

驚きあきれる。「隊長[64]の事は皆んな生まれた時から知っとるのに，自分は相手の事，何にも知らんのじゃ」とつぶやくわけしりの良一と路地の過去に無関心な秋幸のやりとりは，オリュウノオバとアニのそれを彷彿とさせる。一方，秋幸は，良一の路地の幽霊や魂などの「辛気臭い話を好むところ」[65]を多少うっとうしくも感じていた。

今は路地からも出て「朽ちかけた小さな家」にひっそりと住んでいるモヨノオバは，秋幸を一目見ると「おびえたように目をみひらき後ずさりし，唇を突き出して葉と葉がこすれあったような，喉笛からじかに出たようなしゃがれ声」を立てた[66]。

> その声は言葉ではなく単に喉から音が立ったというもので，それを耳にして秋幸は女が物を言えぬ唖の状態だと分り，不意に気後れしたように立ちどまって，家の土間から勝手口に抜けて雑草の茂みを踏みながら歩いてくる良一に眼を移した。「モヨノオバ，秋幸じゃ。死んだ郁男の弟，フサの子，あの茨の龍造の子」良一は垢じみてみえる寝巻のようなズンドウの夏服を来た藁髪の女が言葉を聴くのは何の障害もないというように言い，女が口をぱくぱく動かし息を吸い込みながら立てるような声に耳を傾け，間をおいてうなずき，「隊長が電気屋じゃと思いたんじゃて」とわらう。「物をうまいぐあいに言えんのじゃな」「生まれつきでなしに若いとき唖になったんじゃが，隊長はこの姐（イネ）の話知らんのかい？」[67]

秋幸は，良一の通訳を介して，モヨノオバから突然声の出なくなったあらましを聞いた。

> 突然声が出なくなったのは恋仲になった男の振った前の彼女がモヨノオバの飲むお茶に毒を入れたからだ。だがその話は路地でこう変った。或る日，夕暮れ時，今は跡かたもなくなっている路地の山の方で幾つも羽音がする。ふと振りあおいで見た。まだきらきら光るほど青く明るい空に浮きあがった路地の山，その頂上の一本松のあたりから押し殺した羽音を立てて彼方に向かって幾つも羽根の生えた人間が翔び上がっている。昔から一本松に高麗や唐天竺から飛来した天狗が腰かけているのを見たという話が路地にあったので，モヨノオバは，次々と翔び上がっている人間らを天狗の一種，鴉天狗と見破るのはわけなかった。驚いたし，人にも見せてやりたかったので声を出して人を呼ぼうとしてふと気づくと，鴉天狗が一羽，モヨノオバの真上に翔び来たって囁く。永久に声が出んようにしてやる。声を上げようとするもうすでに出なかった。[68]

秋幸は，自分には「獣」[69]のような声にしか聞こえないモヨノオバの声を，それを聞き取り通訳する良一によって理解することができた。モヨノオバの「語り」は，自分を襲った男の顔を思い出させる秋幸に対する恐怖をごまかすために語った話に過ぎず，先祖の苦難の歴史を後世に語り継ぐという性質を持つ嫗の語りではない。しかし，良一を介することで，モヨノオバの「獣じみた声」[70]は，路地の人々の異形の者に対する恐怖と，ひとりの老女を抑圧し沈黙させ続ける強姦者と共同体の残酷さを，何も知らない若者に語り伝えることができたのだった。

後日，秋幸は龍造が過去におかした犯罪を明らかにするために，モヨノオバに再度会おうとする。ヨシ兄が実子に撃たれ，龍造が自殺を遂げたとき，

---

[65] 中上健次，「地の果て　至上の時」，258頁。
[66] 前掲書，121頁。
[67] 前掲書，121頁。
[68] 前掲書，122頁。
[69] 前掲書，122頁。
[70] 前掲書，123頁。

良一は秋幸の頼みを拒絶する。

「二人共したい事をして来たんじゃ。したい事をして出来たのが秋幸じゃし，俺じゃ。俺はもちろん龍さんの子でないしヨシ兄の子じゃないけど，穢ない親の股の汁から生まれたのは一緒じゃ。龍さん，死んで，これで俺と隊長は互角じゃ。もう二度と，隊長がどんなに頼んでも，俺を脅しても，啞のモヨノオバに会わさん。秘密は秘密として塞ぐんじゃ。いつか，隊長に半分の人間の事言うたの覚えとるじゃろか。秋幸さんのした事を思い出して言うとった時もあるし，モヨノオバがどうしたと訊くたんびに手話で，今，見て来たみたいに言うとったんじゃが，秋幸さんのした事を思い出して言うとった時もあるし，自分を半分人間に置き換えて，片目，片手，片脚でケンケンしながら，駄菓子屋で物を盗み，路地にただ一人居た毛坊主の礼如さんの歩き方がおかしいとついて廻り，山で他所の地区の者と喧嘩したと言うた。モヨノオバ，龍さんとヨシ兄を怖ろしがっとった。二人が死んだら，半分の人間はもう必要ない。嘘をつく必要もない。」

「慰めてくれとるのかい？」

秋幸が言うと良一は口をつぐみ，青みがかった昏い眼をむけて，「慰めとるんじゃろねえ」とつぶやく。[71]

自分の過去や本心を決して誰にも語らなかった龍造とは対照的に，良一は秋幸に自分の心情を率直に語っている。モヨノオバの沈黙も，お前は捨て子だと言うヨシ兄の主張も，良一にとっては，母と父からの拒絶であり，そのために良一は自分を「半分人間」と感じていたのだった。しかし，「半分人間」の物語は，強姦によって生まれた子供という物語から，つまり，知れば生まれてきたことを後悔することになるかもしれぬ残酷な真実から良一を守ってきたともいえる。「秘密は秘密として塞ぐ」という良一の言葉は，モヨノオバの沈黙の意思の代弁であり，永遠に息子と名乗ることのできない自分の運命を受け入れるという良一自身の声でもある。母と名乗らないことで子を守ろうとする母と，性暴力の恐怖にとらわれたままの母を理解し守ろうとする息子，この母子というアイデンティティを放棄した二人がかわす究極の母子愛を描くことで，中上は「無告の声」の表象を可能にしたのである。

また，母つまり起源を求めることを放棄している良一は，実は，路地の男の誰よりもノマディズムを体現しているといえよう。これは，路地の血筋の起源をジンギス・カンに求め，その正統性にこだわるヨシ兄と顕著な対照をなしている。この意味において，良一は父親を超えている。柄谷がいうように，「先行する世代を乗りこえ」，「絶えず前進する」ことが「父を殺すこと」[72] であるならば，良一は「父殺し」を実現しているのである。「父殺し」を引き延ばすうちに父に死なれてしまった秋幸が「慰めてくれとるのかい？」と感じたように，良一の言葉は，ともに父の抑圧から自由になり，「絶えず前進する」ことを兄に呼びかける弟の声として読むこともできるだろう。

結論

本論考では，中上健次の連作短篇集『千年の愉楽』と『地の果て　至上の時』に登場する，紀州熊野の被差別共同体「路地」の中でも最も周縁的な存在であるオバと呼ばれる老女たちの声を，作家がいかに表象したかを考察した。中上は，オバたちを，共同体の苦難の歴史と物語を伝承する語り部の老女―「嫗」―の役割を担う者として描いた。『千年の愉楽』に登場するオリュウノオバは，路地唯一の産婆としては，路地の者の「仮母」のような存在ではあるが，毛坊主の妻で，息子を亡くした新平民の老女としては，帝国主義，家父長制，社会階級，地政学的条件などの文脈において，

[71] 前掲書，434頁。
[72] 柄谷行人，『坂口安吾と中上健次』，講談社文芸文庫，2006年，175頁。

重層的に抑圧される者である。オリュウノオバは，死んだ者の霊魂や，路地の「火を噴くような屈辱」の過去や，差別やイデオロギーへの憤りを語るが，その声は，文中で鉤括弧に括られない，つまり，発話されない意識にすぎず，外部には決して届くことのない「聞かれざる声」である。また，オリュウノオバの意識（語り）は，主流社会の規範や科学から視ると荒唐無稽で不条理や矛盾に満ちたものとして描かれている。これはスピヴァクの「排除された現地生まれの情報提供者」である「南のもっとも貧しい女性」の語りを，知識人が理解し表象することができるのか，という問いにも通じる。このことから，『千年の愉楽』をサバルタン表象の（不）可能性を示した実践的な文学として読むことができよう。

一方，『地の果て　至上の時』に登場する発話障害を持つモヨノオバは，路地の嫗になれなかったオバである。男たちに強姦された恐怖によって声を失ったモヨノオバにとって，路地は，私生児を抱えた自分が移り住める唯一の場所であったが，移住者として，先住者から差別を受ける場所でもあった。モヨノオバは「被差別者は差別者」であるという構造によって抑圧されてきた女性である。しかし，モヨノオバの「言葉にならない喉の声」は，秘密の息子良一によって通訳され，移住者や障がい者を差別する路地共同体の残酷さを若者(秋幸)に伝えることができた。

モヨノオバの沈黙は，強姦から生まれた子という過酷な事実から息子を守るという意思であり，息子の良一も無言のままにそれを理解し受け入れた。この母子というアイデンティティを放棄した母子を描くことで，中上は「被差別者」にも「差別者」にもならない存在の可能性を示した。アイデンティティを欲する行為は，自己と他者を分けるという差別の因子を不可避的に含んでいる。被差別者にも差別者にもならない者とは，親族，共同体，国家など，いかなるアイデンティティにも帰属しない，つまりいかなる差別の構造にも帰属しないと決めた者である。モヨノオバと良一の関係も，オリュウノオバと人生を生き急ぐ路地の若者の関係も，血縁という根拠ではなく，お互いの存在をいたわる愛によって結ばれたものである。虐げられ傷ついた者への愛と慈しみ，それこそがオバの語りの神髄であり，中上健次が描き，読者に伝えようとした被差別の老女の「無告の声」であるといえよう。